

「今、私の晴雨計は！ ㊶」

「二度目の青春」

グリーオーB合唱団

コンサートを終えて

平山 征夫

私は学生時代、横国大グリーオーBという男声合唱団に所属、大学生活のかなりの時間をそこで過ごした。定期演奏会、演奏旅行、合唱コンクールなど結構活動は多かった。一緒にだったメンバーとは今も親しくしている。わが青春の大切な一ページを彩っているのだ。

そのグリーオーBにはもう一つオーB合唱団がある。卒業して就職して企業人として活躍した後、もう一度合唱を楽しみたいという連中が集まって結成したもので、ずっと横浜で活動してきたのだが、そのオーB合

唱団の新潟公演が去る十一月十二日、十三日新潟市で開かれた。横浜以外では初めてのコンサートだった。その実行委員長の大役を仰せつかった私は、無事終わった今ほっとしている。聴いてくださった皆さんから「良かった」と喜んで貰ったことが何よりも嬉しかった。

オーB合唱団の活動はよく知っていた。当初知事を退任したら早晚川崎市の自宅の方に移る積りでいたし、その折にはオーB合唱団に入ろうと思っていたからだ。しかし、昨年（二〇一五年）夏、毎年私ども夫婦が実質主催している東京文化会館での「TOKI弦楽四重奏団」のコンサートの前に、オーB合唱団の団長さんから逢いたいと言われ出掛けてみると、新潟公演の要請だった。瞬間頭をよぎ

ったのは「やれるかな」だった。一〇年以上TOKIコンサートを新潟市で開催してきて、クラシックコンサートの子ケット販売がいに難しか承知していたし、残念ながら横国大の知名度が新潟では低いのも気になった。しかし、私の口から出たのは「分かりました。やりましょう」だった。五十一年前のことを思い出したのだ。

大学を卒業後入った日銀では仕事との調整が難しく合唱団には入らなかった。合唱とは無縁のまま二十余年が経った時、日銀新潟支店長として久振りに故郷に戻った。そんなある時、地元第四銀行の頭取に「メセナを考えているのですが、何か良いアイデアはありませんか」と聴かれた。少し考えて「小さいけれど音の

良いホールの建設と第九のコンサートはどうですか。第四の第九というのは受けますよ」と答えた。こうして始まった「第九」には新潟支店長時代は勿論、知事時代も都合をつけて極力参加出演した。久方ぶりの合唱活動だった。

知事として行った文化行政でも合唱を採り上げた。これからはアジアの時代、アジアを理解しようとはじめた「新潟アジア文化祭」において「アジアユース合唱団」を結成したのだ。ユースオーケストラをモデルにしたものだが、日本とほかのアジアの国の若者五〇名で組成、新潟で合宿し、コンサートを開くという企画だ。テープ審査で選んだメンバーのレベルは高かった。新潟に向かう東京駅のホームで初対面のメンバーは、予

め渡されていた楽譜の歌を自然に歌い出した。

そして、一〇年で第四銀行がコンサートを降りた後も市民主催で「第九」は続き、年末恒例の風物詩と言われるようになった。私は一〇〇年続けようと言って、毎年一番前の真ん中で歌わせて貰っている。

こんな音楽活動歴でそれなりの人脈も出来ていたが、合唱のコンサートは主催したことがなく、まったく自信がなかった。でも知名度は低くても少数精鋭の同窓会もあるし、最後は毎年来てくれるＴＯＫＩコンサートは毎年来てくれるので何とかやるだろうと思った。それ以上に「やろう」と私に決心させたのは、五十年前の大学三年生の時、私の故郷柏崎市で夏開いたコンサートのこと

だった。三木稔さんの「レクイエム」

の本邦初演に備えた夏の合宿を柏崎で行ったのだが、その傍らコンサートを開いたのだ。その時、チケット販売に力を貸してくれたのが私の小中高時代の同級生たち（彼らにはその後知事選挙でもう一度お世話になるのだが・・・）と横国大の同窓の先輩方だった。数人しかいないＹさん達ＯＢが必至でチケットを販売してくれたのだ。そのことを思い出して「今度は自分がその役を果たさなければならぬ。二度も故郷でグリーのコンサートが出来ると、むしろ喜ばなければならぬ」と考えたのだ。

お蔭でコンサートのチケット販売は何とか形になった。コンサート自体もミュージカルキャッツの「メモ

リー」などなじみ深い曲が多かったこと、賛助出演してくれた「合唱団にいがた」との一三〇人の「花は咲く」の大合唱もあり、大拍手の中で終わった。

翌十三日の無料の「スペシャルコンサート」には、知的障害者と視覚障害者とそのファミリーを招待していた。それは五十年前も合宿の合間に養護学校慰問コンサートを行っていたことと、私が新潟のＳＯ（知的障害者にスポーツをやる機会を提供するボランティア団体・スペシャル・オリンピクス）の理事長をしているからだ。視覚障害者は音に敏感で、音楽好きという人が良くコンサートに来ておられることを承知していたからだ。

コンサートが始まった。私が提案

して出来たあの音の良い第四ホールでグリーメンも気持ち良さそうに歌っていたが、何よりも障害のある子供たちが大喜びで、楽しそうだ。皆で一緒に歌おうというコーナーになったら一挙に盛り上がった。司会者の好リードもあって会場は楽しさと温かさに包まれ、皆が生きていることと音楽のあることの幸せを感じると感動的コンサートとなった。嬉しかった。一番前にいた多動性障害の女の子は途中から声を上げてお母さんが抑えるのに必死だったが、休憩時間にお母さんが私に「この子が初めて歌を歌ったのにびっくりしました」と言ってきた。トトロの歌を体を動かしながら歌ったのだ。二頭の盲導犬も楽しんでいるように見えた。

私と同じ平均年齢七十二歳のグリーオービ、ステージに登場する姿などお世辞にも「若い」と言えないが、その歌声はとも若々しかった。大好きなグリーメンとして「第二の青春」を謳歌しているからだろう。

正直ちょっと羨ましかった。私も傍で聞きながら五十年前、何のためらいもなく取組んだあの柏崎でのコンサートとその頃の自分を思い出していた。戸惑いや惧れということを感じずにやりたいことにまっすぐに挑んだ二十一歳の自分が懐かしかった。今回このコンサートを引き受け、私も「第二の青春」をちよっぴり味わい幸せな気持ちになった。サミュエル・ウルマンの「青春とは」と言う詩が頭に浮かんでいた。

「青春とは人生の或る期間を言うの

ではなく心の様相を言うのだ：年を重ねただけでは人は老いない。理想を失う時に初めて老いが来る：」。年齢的には「青春」ではなく「聖春」になりかねないのだが、皆に負けないうよう若々しくいよう。

(平成二十八年十二月十九日)